

学位授与番号	医博乙第1322号
学位授与年月日	平成6年10月19日
氏名	坂井明美
学位論文題目	出産後の乳汁中アミノ酸レベルに対する授乳行動因子に関する研究

論文審査委員	主査教授	永坂鉄夫
	副査教授	谷口 昂
	助教授	中村裕之

内容の要旨及び審査の結果の要旨

児の成長にとって母乳哺育は栄養補給のみにとどまらず、乳児が長期間にわたって母親との接触を剥奪されると精神、運動発達上に欠陥が認められるとの報告があるように母乳哺育についての研究にあたっては、母と子の行動および乳汁組成の両方面からのアプローチが必要となる。本研究では、正常分娩により出産した婦人を対象に、母子相互作用の立場から授乳行動因子と人間の成長、発達に重要とされる乳汁中アミノ酸との関連を明らかにし、母乳哺育のあり方について検討し、以下の結果を得た。

1. 授乳行動因子を考慮しない場合の乳汁アミノ酸レベルの左右間の比較では有意差を認めなかった。
2. 左側の相対的授乳行動と左側の乳汁アミノ酸の絶対値との相関関係を調べ、この分析に加えさらにアミノ酸レベルの左右差との関係を調べた結果、乳汁分泌状況が相対的に良好の側に乳汁アミノ酸レベルが相対的に高いという正の相関が、アスパラギン酸とスレオニンにおいて認められた。逆にメチオニンでは乳汁分泌状況が相対的に良好の側に相対的に低いという負の相関が認められた。したがって、授乳行動が良好な場合には、過剰摂取による成長阻害を促すアミノ酸の分泌が抑制されるという関係がみいだされた。
3. 母親の行動因子である授乳時間の長さについては、リジン、アルギニン、アスパラギン酸、グリシンにおいて正の相関が示された。
4. 児側の行動因子である吸吮行動についてはスレオニンで正の相関が観察された。
5. 授乳時間の長さと吸吮行動の有意な関係は特に、産褥期である出産後1ヵ月の差に基づくことが認められたため、この時期の哺乳機構の未熟性によるものと考えられた。
6. 乳房機能像に対してはスレオニンおよびセリンが正の相関を示した。この結果は、乳房の循環動態の不良が乳汁分泌量だけでなく、乳汁の質の低下をも引き起こすことを示唆している。

以上、本研究は授乳行動の左右における偏性が乳汁中のアミノ酸レベルの多寡を決定していることを示し、授乳行動の偏性の問題を考慮した母子保健指導の重要性を指摘した点で、母子保健学領域に寄与する貴重な労作として評価された。